

『モリーズ・ゲーム』モリー・ブルーム 著 越智 睦 訳

一夜を境に裏社会をのしあがる、サクセスストーリー！
 ディカプリオなど著名人が実名で続々登場、驚異の実話。

2013年、モリー・ブルームはポーカーゲームで違法に利益を得ていた容疑でFBIに逮捕された。モリーが経営する招待制のポーカールームには、ハリウッドの有名セレブや人気スポーツ選手、大物実業家を通いづめ、驚くほどの大金が賭けられていた。極秘ポーカーの存在は全米でセンセーショナルに報じられ、モリーは一躍“時の人”となった。コロラド州の小さな田舎町出身のごく普通の少女が、いかにして20代半ばで成功を収め、一晩で億単位の金が動くポーカーを仕切ようになったか。そしてなぜ、絶頂から転落したか——。本書は、裏社会をしたたかに生き抜いたモリーの物語である。特筆すべきは、本書が完全な実話であること。ディカプリオをはじめ、ベン・アフレックなど著名人が多数実名で登場している。モリーのサクセスストーリーとともに、賭博に取り憑かれた男たちや、欲望渦巻く裏社会の駆け引きも存分に描かれる。映画『モリーズ・ゲーム』と合わせてお楽しみいただきたい。(担当編集N)

『わたしを探して』J・S・モンロー 著 柵橋志行 訳

二転三転、登場人物誰もが信用できないミステリー。
 読了後に、きっとあなたも二度読みしたくなる。

主人公ジャーはロンドンでマスコミ方面の仕事をしている。ケンブリッジ大学在学中の5年前、彼は恋人ローザを自殺で失っていた。だが、彼女の死をいまも信じられずにいた。海に身を投げたとされるが、遺体は発見されていない。そのうえ近頃は街に出るたび、彼女を見かけた気がしてならない。そんなとき、ローザの叔母から姪の日記が見つかったと連絡が来る。ケンブリッジ時代の主人公ふたりが描かれる日記中のエピソードは甘酸っぱい青春小説の香りが漂い、そこへじわじわ謀略小説の大きな絵が迫ってきて、サイコスリラーの要素を交えながら話は一転二転、思いもよらない展開へとつながっていく。順不同で開かれていく日記のひとつひとつが大きなパズルのピースとなり、絵がはまっては崩れ、また一から組み立てなおす作業を余儀なくされる。青春、謀略、猟奇と、一冊で3ジャンルの小説を読んだような気がする大胆な構成。各所にちりばめられる巧妙な仕掛けに、読んでいる途中でいったん前に引き返したり、読み通した時点で二度読みしたりせずにいられなくなった。その意味を、本書を読まれた方々と共有できたら幸いだ。——「訳者あとがき」より抜粋

『ゲティ家の身代金』ジョン・ピアースン 著 鈴木美朋 訳

世紀の誘拐事件を題材に、映画化！
 “世界一嫌われた”大富豪の数奇な一生。

1973年、世界的な大富豪ジャン・ポール・ゲティの孫が誘拐された。請求された身代金は1700万ドル。ゲティは声明を発表し、巨額の支払いを拒んだ。「わたしにはほかに14人の孫がいる。1ペニーでも身代金を払おうものなら、14人全員が誘拐されることになる」

さまざまな伝説を残す大富豪ゲティとはどんな人物なのか。異常なまでのビジネス手腕、繰り返された結婚、子どもたちを不幸にした気まぐれなど、ゲティの誕生から死を迎えるまで、そして彼の死後の一族の姿が徹底的に描かれる。醜聞にまみれた大富豪一族の真の姿に迫る伝記でありながら、「事実は小説よりも奇なり」というように、大河ドラマのような読み応えと満足感がある。ノンフィクション好きにも、大河小説好きにも熱くお勧めする。(編集担当N)